

海上特攻艇始末記

—ト号作戦出撃せず—

東京都 長岡清彦

—最初に長岡さんの軍歴をお聞かせ下さい。

昭和十七年一月に東部第八部隊（麻布第三連隊）に入隊、三か月の初年兵教育を受け、全員が四月に満州ハルピンの第九七部隊に移動になりました。昭和十八年三月から十二月まで東安省東安の航空基地の作業隊として派遣されましたが、この間が訓練並びに警備期間といつてよいでしょう。

—それからどうされましたか。

船舶兵として昭和十九年二月に曙部隊に転属になりました。四月に北千島警備に行く間が、船舶兵としての教育期間並びに待機の時といえましょう。

昭和十九年四月から翌年四月までが北千島撤収、特攻待機、大きく四期間に分かれます。そして最後まで

謎であった海上特攻艇始末記ということになります。

以下その順序に従い私なりの戦記についてお話ししましょう。

一、初年兵教育並びに満州警備

入営の日は父と義兄に送られ、いつでも引き受けるから病気になるでも逃げ隠れするな、の声に励まされ勇んで営門をくぐりました。初年兵教育は主として青山の練兵場でしたが、演習の最中墓に供えたお萩や饅頭を食べる異様な風景をしばしば見ました。休憩時間に必ず演芸会があり、私の浪花節は好評の一つでした。渡満を控え、桜が満開の四月十日、家族と最後の面会がありました。面会があった日から二日後、軍用列車で品川から広島へ、広島から釜山、釜山からハルピンに向かいました。着いた翌日から第二期の検閲まで猛訓練です。

関特演を無事に済ませた翌年の三月、東安の航空隊に出張を命ぜられ基地建設作業を無事終了し、十か月で原隊に復帰しました。帰隊すると初年兵がきていて古兵天国の生活を味わいました。好事魔多し、中隊か

ら私一人、他中隊から四名、六千七百名中から僅か五名の転属です。行先は福山でした。

二、船舶兵教育

転属先は砲部隊、海軍は自分のことで精一杯で陸軍のことまで手が出ない、そこで陸軍の海戦隊ができたのです。

着いた翌日から早速私達は幾組かに分かれ七人づつ小型のスマートな船艇に乗せられての訓練でした。この船艇には一千馬力の航空エンジンがついているのでその早いこと。美しい、波静かな瀬戸内海での訓練の日々でした。歩くのが苦手な私を西村准尉が船舶兵として推薦してくれたのでしょう。私は感謝の気持ちで一杯でした。船艇の訓練以外は呑気な毎日で、たまに機関銃の分解や操作を古参下士官から教わりました。

先着の船舶兵は四十歳代の応召兵で、後から来る古参兵になめられるといけないといっているので数週間で一等兵に昇進させられたという。軍隊も妙なことをやる、と変なところで感心しました。船舶兵に小銃がない。小銃がない軍隊があるとは想像もませんでした。服

装もまたジャケットやワイシャツでこれもお構いなし。物資の不足も遂にここまで来た。タラワ、マキンも玉砕、次はどこだとこそそ噂にのぼりました。

ある日、部隊長の訓示があり、

「我が部隊もト号作戦に参加することになった。名前を呼ばれた者は一歩前へ」

と。約半数の者が呼ばれ私もその中に入りました。翌日、山口県田布施の西部第八部隊へお預けとなり、この柳井の半か月はコーヒー店や映画などでブラブラ過ごしました。

広島からきたト号作戦要員全員集合の下全員列車に乗せられ北上、懐かしの東京も過ぎた頃、北海道警備でなく千島警備かアリウシャンかなどと噂しあいました。

船舶部隊は全国並びに占領地の各部隊から五名、十名の寄せ集めなので、出身県も階級も分ならず古兵が一等兵に敬礼する始末で、占守島に駐屯するまで不明のままでした。

函館を過ぎ、小樽で下車、そこで民宿することに

なった。上野軍曹からそれぞれ民家を割り当てられ、私と古賀は「花の家」という喫茶店で、そこから古賀との戦友としてのつきあいが始まりました。古賀は四十四歳の召集兵で島根に胸をやんだ奥さんと三人の子供がいるとか。本人も胸をやんでいるが、「何だこれぐらい」と召集になったとのこと。ああ無残の一言です。

古賀の話によると砲部隊に入ったのは四十歳代が大部分で、中には五十歳を超える人もいるとか。軍隊経験のない人がほとんどで、中隊長も五十歳代、一体どうなることかと心細くなりました。

「春の家」は苗字を出島さんといい母親と薫さんという娘と二人暮らしである。薫さんと小林さんのエピソードと悲恋が生まれるのだが、この話は傍道にそれるので触れずにおきましょう。

小樽滞在中、余興やら隠し芸大会で、こんなことよいのかなどと夜中に目が覚めた時にふっと思えました。それでも時々内然機関の講義やら暗号、手旗信号の教育もありました。

四月七日、いよいよ出発である。私達「轟船舶部隊」の目的地は北千島の占守島であった。

人の捨てた軍票や儲備券を拾い集め、それで交換した日本円が出島さんへのお礼や古賀の結核の薬や故郷の奥さんへの送金に役立ちました。

乗船したものの船は繫留されたまま、出航したと思うと潜水艦に追尾され、大湊港に避難しました。

三、空襲下の陣地構築と警備

四月十五日、二十時三十分、やっと占守島に接岸しました。そこには掘立小屋があるだけで、応急修理して仮眠、うとうとする閑もなくヒュルヒュル、ババインの炸裂音、つづいてドカドカドーンの艦砲射撃、それに飛行機の爆撃。ああこれから先が思いやられる。翌日、乾燥野菜、缶詰、米俵、麦俵、小豆等の箱を陸揚げして五百メートル先の中隊広場まで運ぶのです。千島は夏は昼ばかり、冬は夜ばかりで、すっかり体の調子をおかしくした人もいました。食事の際の生鮭の美味かったこと。内地で食べていたのは塩鮭だったのです。

その夜は疲れてぐっすり寝ましたが、翌日正午過ぎB25が突如来襲、機銃掃射、あわれ、荷物運搬中の小林上等兵は即死、「花の家」の薫さんに何と知らせたらよいかと暗然としました。上野班長が小林の右手の肘関節の処を鉋で打切り中隊へ持って帰りました。古賀のことは船中でよく話したので重労働を免除され内務勤務にまわして貰いました。兵の中の漁師出身の人達で漁師隊を組み、鮭、鱒、鱈等を獲ってくれたのは大助かりでした。

ある日、菊田少尉の提案で対岸のパラムシロ島へ行くことになり、全員乗船し少尉の操縦で三時間半かかり島に着岸、何のことはない、元の占守島です。歌もピアノもうまく兵隊の評判もよかった少尉もこのことで一べんに名声が墮ちました。翌日には今度は島山上等兵の操縦で二十五分でパラムシロ島に着きました。

良い空家があったので一番良い建物を選んで中隊の兵舎にしました。そこにはキスカから無血撤収した老兵がおりいろいろ貴重な経験を教わりました。丘の頂上に大砲が二門供えられていたが、大木をくりぬいた

模型だったのには呆れてしまいました。これでどうやって島を守るのか最後まで分からず仕舞でした。戦後五十年たってやっと、ト号作戦のことが理解できましたが、最後に締め括りで申し上げます。

長い冬の夜を過ごすのに一苦勞でした。講談と浪曲節と暮の油を数人でやっていたが種切れもいどころでした。朝洗濯して、これが乾く頃もう夜です。不寝番の主たる任務はストーブの火を絶やさぬことで、菊田少尉から分厚い本を借りて時を過ごしました。

ある朝、人事係准尉が温根古丹島への移動を告げました。移動のたびの食糧、衣料、薪も、ついて廻りしんどいことでした。翌日、目指す島にいたが掘立小屋一つない。テント生活が始まりました。他中隊が上陸用舟艇十艇を出し演習を始めたので護衛中隊である我が隊から全船（三隻）出動となった。護衛中隊と言っても、軽機、小銃ともに一丁。敵襲があればどうすることもできない。私は志願して見張台に立ちました。

「前方五千メートルに敵潜水鏡を発見」

の声に、中隊は「射つな逃げろ」の命令、そして船団にその旨伝える。

やっとオネコタン島へ戻り夕食。何が護衛中隊かと装備の劣勢に腹が立つより呆れました。オネコタン島の春は美しかった。百花繚乱で一面のお花畑である。漁師、猟師、板前と結構腕前の良いのが揃っていました。

その中、轟部隊が全員この島に集結しました。共同農場で作業中、B25の大編隊の来襲、シュルシュルという金属音、バーン、バーンという炸裂音、二手に分かれて、一方は山の斜面の横穴式防空壕へ、他の者は畑の中や防空壕へ逃げました。爆撃の後は機銃掃射。軍隊は運隊とはよくいったもの、畑へ逃げた方はほとんど全滅し横穴式防空壕へ逃げた者は助かりました。そこが爆弾貯蔵庫だったとは神ならぬ身、知る由もなかった。後日、身を挺して爆弾庫を護ったと部隊長の感謝状まで貰ったのには恐縮しました。部隊長は報復を宣言したが小銃一丁では報復なんか出来っこない。班は四十二名のところ半分の二十一名になってしまい、

広島からの戦友の多くが戦死しました。

将校も下士官も兵もいざという時、根性をさらけ出すものだとつくづくわかりました。中隊長はどこかへ姿を隠し、岡村少尉が変わって指揮をとりましたが、空爆中、船の中で泰然自若として動じませんでした。大野と柴山が櫓を漕いで救助に行ったのですが、動きませんでした。

敵機は退散し、後始末の後の酒の美味かったこと。それに蛙、何もいうことはない。

その後、私と古賀は縫工兵として、他は兵舎の建築やら壕掘りやら、忙しくも単調な日が続きました。閑を見ては漕に打たれたり、スキーに乗ったりの毎日でした。

再び二日ばかりで占守島へ移りました。中隊本部他七軒建てるのに昼夜兼行でした。

内務班のごたごた、殺すの殺さないのはこの世界にもあること。まして女つ気のない狭い島では日常茶飯事と割り切りました。しかし、古賀だけは全力で庇護しました。

そんなある日展望台の森下が

「敵機来襲、数千メートル前方」

と叫んで下りてきました。小さな島を目指し船を走らせたが岩礁のため着岸できない。櫓船を下ろし全員退避しました。「長岡は船に残れ」の班長の命で一人船に留まりました。熟練の漁師出身の機関長は岩陰に櫓船を導いた。何故俺一人が残るのかと怒りに燃えた心で軽機で身構えました。敵機は船の上を円を描いて旋回しながら近づいてくる。当たって砕けるとばかり軽機を射ちまくった。

奇跡がおきた。飛行機が胴体から火を吹きキリキリ舞いをしながら墜落していった。万歳を叫びながら全員、岩陰から飛び出し櫓船に乗りガヤガヤと本船に戻ってきました。私は腰をぬかして展望台の床に尻もちをつき、喜びより愕きの方が大きかった。俺がやられないで俺がやったのだ。幸運だったのだと漸く喜びが湧いてきた。

四、撤収作戦

飛行機撃墜のお祝いやら、陣地構築やらで一日一日

が過ぎていきました。また岩の上で寝込んで置き去られ、やっと気付いた同年兵二人の櫓船で救助されるというところもありました。長岡がいないと海上での炊事が困るといふことが真相らしかった。マツワ島への往復も危険極まりなかったが、よく任務を遂行しました。古賀の奥さんの死の連絡があったのも、マツワ島に届いた手紙で知り、古賀の落胆ぶりは傍らでも見えてられませんでした。

山崎部隊長から、敵機撃墜の賞状を貰い兵長に進級しました。

その中、轟部隊は北海道引き揚げの噂がとびいつか真実になってきました。食事が豪華になり、味噌、醬油も惜しみなく出され、酒、煙草の特配もあるというように。

昭和二十年四月のある日、准尉からサイパン陥落、沖繩上陸の間近かのことを知らされ、轟部隊は北千島を離れ北海道へ行くことを告げられました。明日、本船が迎えに来るからと、第一船、第二船、第三船に乗る兵の氏名を呼びあげられ、第二船は第一船出航後い

つになるか分からない。私と古賀は第一船でしたが古賀は病床に伏し、乗船の前日息を引き取りました。第二船の乗船予定者から五人の兵が第三船を希望しました。占守船には備蓄食糧が沢山あるから腹一杯食べたことでした。

島でお互い助け合った大野戦友が第一便の乗船に洩れ、島で空襲を受けながら第二船の迎えを待っていました。しかし、その第二船は中千島沖であわれ潜水艦の砲撃で沈没してしまいました。勿論、空爆もあり、あつという間の轟沈です。第三船乗員要員は島で待機中に敗戦になり、進攻したソ連軍と交戦、一部は戦死、生き残った者はシベリア送りです。私達第一船組は四月二十一日小樽に上陸、渡島前に世話になった人と旧交を暖めました。

五月から鹿島郡鹿島で特攻艇隠匿用洞穴掘削の明け暮れでした。勿論幕舎生活です。

そして作業中、運命の八月十五日を迎えたのです。

八月十七日、修道院に収容され、九月二十日復員しました。

五、特攻艇始末記（ト号作戦出撃せず）

広島の曙部隊に転属の時、海上輸送部隊かと思つたがト号作戦要員として呼ばれ、何のことか分からないまま終戦後四十数年が過ぎてしまいました。おぼろげにしか分からなかった特攻艇のことが先日、テレビを見て始めて全容がわかりました。特攻隊のトの字をとりト号作戦と名付けたので、戦争初期の特殊潜航艇を小型にしたものです。飛行機も戦艦も空母もなくなり、海軍は人間魚雷に、陸軍は特攻艇による攻撃しか敵に当る手段は無くなったのです。

ボートの五分の一に満たない豆粒のような舟に消音器がついてエンジンの音を消し速く静かに走るやつです。これに爆薬を積んで敵に体当たりする訳です。

狙うのは敵艦の機関部です。機関部でなくとも敵艦にぶつかって沈めてしまふのが目的です。これによく似た攻撃に爆弾を抱いて戦車の下に飛び込んで、体もろとも爆破し戦車を攔座する肉弾攻撃というのがありました。問題は大抵ベニヤ擬装の小艇で荒海を乗り切つて

敵艦に近づけるかということですが。

材料不足で特攻艇の完成をみず遂に海上特攻隊のト号作戦は為すことのないまま敗戦を迎えたのです。幻のト号作戦でした。

千葉や茨城や北海道に構築した特攻艇を秘匿する洞穴掘徒労でした。

シベリア送り員数不足

北鮮で戦後の召集

宮崎県 金丸元美

昭和十四年徴集兵として同年十二月、朝鮮大邱の第二十四部隊に入隊しました。

その後一期の検閲を経て一等兵に進級、原隊勤務を続け、翌年には上等兵に進級しました。その間初年兵教育等種々の勤務に携わりました。三年間の兵役を終えて昭和十七年十二月兵役を解除され除隊しました。

その後入営前の勤務先である朝鮮咸鏡北道敬光郡アゴ

チの旭化成石炭液化工場、航空燃料製造工場に再就職しました。

昭和二十年八月八日、ソ連軍が一方的に日ソ不可侵条約を破り朝鮮にまで侵攻を開始しました。旭化成の社員の家族は十月十五日急遽新京に避難させることとなり、四十世帯の家族を移動のため誘導班を編成して新京まで輸送しました。ところが十一月十五日、ソ連軍の命令により人員不足を補充するためか、日本政府を動かして新京周辺の日本人に対し召集令状を発行しました。私達は南領高等女学校で兵役検査を受けましたが何の事はない、ここに一週間居て、後はシベリアに連行され強制労働に従事させられるのであるが、その時はその後の悲惨な死の労働など神ならぬ身の知るよしもなかったのです。

新京で貨車に詰め込まれ、不安と楽観論の入り混じった談話の中、夜の十時頃ソ満国境を通過したことが分かったのです。翌朝四時、列車はある駅に入り停車しました。一週間はこの貨車の中の生活で、排便以外は下車を許されなかったのです。その間の食事は